

2022年2月14日

2022年日本農業史学会研究報告会の開催案内

日本農業史学会会員各位

前略 時下ますますご清祥のことと存じます。2022年の日本農業史学会研究報告会は、新型コロナウイルス感染症（オミクロン株）の状況に鑑み、オンライン形式により、下記のプログラムで開催することとします。（昨年度とは異なりオンラインのみとなりますのでご注意ください）。

敬具

記

- ・日時：**2022年3月28日(月)**（受付：9：10よりZoom入室可能にします）
午前：個別報告（9:30-12:15）、午後：大会シンポジウム(13:30-17:00)、総会（17:10-17:40）
（*例年と異なり、日本農経学会大会(オンライン大会)の翌日に行います）
 - ・大会参加費：無料
 - ・オンライン参加はZoomにておこないます。
- *会員の方はオンラインの参加方法の詳細は、大会1週間前にメールにて案内の予定です。
*非会員の方で参加希望の方は学会事務局まで連絡下さい。

【I】個別報告（9：30～12：15）（1報告あたり、報告35分+質疑5分=計40分）

会長挨拶 9:30-9:35

第1報告：9:35-10:15

「中世後期イングランド湖水地方の農村景観と混合農業—トラウトベック村を例に—」

報告者 加藤 はるか (立正大学非常勤講師・大阪市立大学 UCRC 研究員)

座長 藤原辰史(京都大学)

第2報告：10:15-10:55

「フランス・オート=ザルプ県における製酪組合普及の動きと性格変化—19世紀中葉から20世紀初頭—」

報告者 伊丹 一浩 (茨城大学)

座長 足立芳宏(京都大学)

第3報告：10:55-11:35

「昭和戦前期における勇払原野開発と酪農経営—北海道苫小牧町・安平村を中心に—」

報告者 井上 将文 (北海道大学)

座長 板垣貴志(島根大学)

第4報告：11:35-12:15

「第3次・第4次PL480協定をめぐる日米交渉—1956～57年—」

報告者 伊藤 淳史 (京都大学)

座長 永江 雅和 (専修大学)

(昼休み：12:25-13:30)

【II】シンポジウム（13：30～17：00）

テーマ：「食の貧困をめぐる近現代史—「食べられない」の変容と地域性—」

座長・趣旨説明：13:30-13:35

大瀧 真俊（名城大学）

第1報告：13:35-14:10

「食の〈質〉的貧困と合理性 —樺太米食撤廃論から考える食の〈自由〉と食の〈正義〉—」

中山大将（釧路公立大学）

第2報告：14:10-14:45

「戦後アメリカ統治期沖縄の給食事業」

小濱 武（沖縄国際大学）

第3報告：14:45-15:20

「食をめぐる「平等」の変容：帝国／国家のなかのコメを考える」

原山浩介（日本大学）

休憩 15:20-15:30

コメント1：15:30-15:45

湯澤規子（法政大学）

コメント2：15:45-16:00

未 定（現在照会中）

質疑応答：16:00-17:00

休憩 17:00-17:15

【III】総会（17：15～17：40）

【シンポジウム趣旨説明】

今回のシンポジウムでは、「食の貧困」をテーマにとりあげる。

現在、世界の食料問題は新たな局面に移行している。かつて問題の中心であった飢餓は絶対数・割合ともに大きく減少し、すでに飢餓人口よりも肥満人口の方が多くなっているのである。ただしその肥満人口は、安価な脂肪分・砂糖に摂取カロリーを依存する貧困層が多くを占めており、「食の貧困」は必ずしも解消されたとはいえない。

また社会学の領域では、戦後日本の貧困を、その「かたち」の変遷に注目して論じる試みが現れている（岩田正美『貧困の戦後史』）。貧困の増減だけでは、1990年代以降の「格差と貧困の再燃」をとらえ切れないという問題意識によるものである。

以上のような食料問題の現状と貧困問題の研究動向をふまえると、食料・農業をあつかう歴史研究においても、飢餓以外も視野に入れた「食の貧困」を論じることが求められよう。そこで今回のシンポジウムでは、日本近現代における「食の貧困」を、「食べられない」ことの中身の変容や地域性に注目しながら議論したい。

「食べられない」の含意は、次のように整理される。1つは、飢餓につながる「食べられない」局面であり、食の「絶対的貧困」と表現することが出来るだろう。もう1つは、摂取カロリーは満たされながらも、特定の食料を「食べられない」ことで貧困を感じる、あるいは貧困とみなされる局面である（食生活の貧しさ）。これはさらに、経済的理由による「相対的貧困」と、政治的・文化的理由によって食の自由や平等が制約された場合に分けられる。また特定の食料とは、近現代日本ではコメであることが多かったであろう。以上のような貧困のあり方は、国内（戦前では帝国内）でも地域による違いが大きかったと考えられる。

従来の農業史研究では、飢餓につながる「食べられない」局面が主に論じられてきた。近

世期の飢饉や、大正期の米騒動、昭和初期の東北・北海道凶作、敗戦前後の配給生活などである。一方、戦前の外米忌避など、食の質に関する貧困については断片的に触れられることはあっても、貧困の一形態として十分に検討されてこなかった。今回のシンポジウムでは、食料事情が大きく変化（戦時の悪化と戦後の改善）した時期を主な対象として、従来見過ごされがちであった「食の貧困」の「かたち」を整理・把握することを目指したい。

*大会については下記の学会事務局までお願いします。

日本農業史学会事務局

office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵便振替口座 00180-9-20117

(連絡先) 〒606-8502 :

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻

比較農史学分野気付

Tel : 075-753-6184(足立)、Fax 075-753-6191